



山田のまちづくり

かつて筑豊に日本で二番目に小さな市があった。三菱や古河の大手炭鉱があったところは5万人を超えていた人口が2万人を切り、山田川沿いにひっそりと静まり返っていた。

四十一歳になったばかりの私が助役として山田市に赴任したのは平成六年四月、二十五年前のことである。当時の新市長が沈滞した市に新しい息吹をもたらさんと、県に派遣を要請したのであった。だが白羽の矢が立った県職員は次々に辞退、断ることを知らない私に御鉢が回ってきたのだった。

それほど山田の市議会は荒れていた。利権の巢窟と言つていいほどで、N有力議員が人事や契約に口を出し、市議会が担当課長を質問攻めにする。何人

もの職員が辞めていった。

幹部職員への私の就任挨拶は、「市町村は末端ではない。先端なのだ。住民の望むことは法律違反でない限りなんでもやれる。二度と末端と言わないでほしい」というもの。

三十二の全ての行政区で市長と全課長が参加し住民懇談会をした。炭鉱労組で活躍した住民が多く不満は爆発、大糾弾会となる。どぶ板が割れて危ない、道路が陥没している、草茫茫々など。だが、ほとんどは市に訴えても何の反応もないという。すべての要望を記録し、必ず課長が現場に行き、できることはやり、できないことはできないと伝えた。それだけで住民の態度が大きく変わりはじめた。

「山田には何もない」と皆が言う。本当にそうだろうか。小堀遠州ゆかりの高取焼で唯一未発掘の、山田窯跡が竹藪に埋もれていた。足利尊氏が祈りをささげて九死に一生を得たと伝わる白衣観音座像と安国寺。原生林の大法白馬山。不知火型土俵入りの元祖と言われる不知火光五郎の墓。狭い市域に宝があふれている。自然発生的に、ウオークラリーが始まる。市職員が一生懸命に宝の説明をする。ウオークラリー

は祭りのように盛り上がり、市民と職員に笑顔があふれた。

ところが、産廃反対市民が市道を封鎖していた。市役所が信用できないからだという。市民に公募をしてイメーリアップ委員会を立ち上げる。道路封鎖の人も入ってくる。構わずみんなで先進地視察に湯布院へ行く。文化的雰囲気仕立てられた会場で、C・Wニールさんがウェールズのボタ山緑化の話をする。興奮してみんなで夜遅くまでまちづくり談義をした。文句を言うためだった人が、勤務時間後に夜遅くまで議論に参加する職員を見て、「市役所も頑張ってるんだ」とポツリ。道路封鎖もいつの間にか解除された。

しかし、本丸は利権だ。指名委員会の長である私の仕事。N利権議員の市長室・助役室への入室を徹底して排除した。議会での質問も私がすべて対応する。法律論では負けない。二人の議論はテレビ中継され市民が目にする。

市事業の入札の問題は、助役が決定する予定価格ではなく、少しでも高額な事業の指名に入れてもらえるかどうかだった。業者は指名を得るために様々な働きかけをする。小さな市なので血縁、地縁など色々な柵があり裏活

動は激しい。指名順を誰にも分らないようにすればよいと思った。指名回数が平等になるように乱数表をいくつも作り、指名委員会の場でくじ引きのように選んだ。これは効果があつた。この仕組みが理解され始めると担当課長の顔がみるみる明るくなるのが分かった。N有力議員は市役所に現れなくなった。

イメージアップ委員会が動き、市民参加の総合計画や地域住宅計画の策定委員会が動き出す。ともかく「やまだ」の議論をした。議会も変わる。公民館や市営住宅、道路など市民の声が反映され洗練されたデザインのものが出来上がってくる。山田川のクリーンアップ作戦が進み、廃線跡にコスモスが植えられトロッコ列車が走り出す。今も春になると、山田川沿いの小さな町は桜の霞に包まれたようになる。三春町との交流で贈られた二本の滝桜の孫も大きくなった。三年をかけて徹底して議論をした、門がないコミュニティスクール下山田小学校に、今でも落書きがないことが私の大きな誇りである。しかし、平成の合併で山田市はもうない。

(中村 仁彦)

「ヒミツキチ森学園」

息子が、隣町にある「ヒミツキチ森学園」に転校することになった。

二年前に家族で散々話し合い、情報収集し、学校見学を行った上で、電車で十分ほどの場所にある、インターナショナルスクールに入学を決めた。

教育の理念や、自由な雰囲気、子供たちの楽しそうな様子に共感しての入学だったが、学校での使用言語が英語、家族や地域コミュニティでは日本語と、ふたつの言語環境の中で息子は暮らすことになった。その負担が次第に大きくなってきたのが、転校を考えた大きな理由だ。

言語以外の理由にも、もちろん経済的な問題、通学時間の問題、仕事との両立(何しろ、六月の半ばからもう夏休みが始まるのだ!)など、様々なことを何とかやりくりしての二年間だった。ユニークで楽しい行事や、教科を横断する面白い学習アプローチなど、親子ともども多くの経験をさせてもらった。だが、英語のスピーキング、リーディング、日本語のひらがな、カタカナ、漢字を同時に勉強しなくてはなら

ないのは、息子の自由時間を奪ってしまう気がしてきた。

うーん、兄たちも通った地元の公立校に転校するか、それともユニークな学校がほかにもあるかもしれないと探してみたところ、隣町にあるオルタナティブスクールを見つけた。オルタナティブスクールとは、認可された学校ではなく、フリースクールなのだが、独自の理念や方針で運営されている学校だという。

ホームページには、木の看板に踊りだしそうな「ヒミツキチ森学園」の文字。うん、これは面白そうだと、すぐに電話をして、二日後には親子三人で学校見学に行った。

葉山の住宅街の中の古い古民家を改装した校舎は、だれかの家のような親しみやすさだった。部屋のなかでは、六人の子どもたちが机をいろんな場所におき、それぞれ勉強をしている。学年も内容も、勉強方法も様々だ。

初めは緊張した面持ちだった息子も、「ちょっと見てみる?」と誘われて授業に入ってもらった。我々が学校の説明を受けている間に、ウクレレの音と息子の一番お気に入りの曲、クイーンの「ウィー・ウィル・ロックス・ユー」が

流れ出すと、息子も大合唱に加わっていた。

次の週の二日間のトライアル入学では、初日から年上のお兄ちゃんに指導を受けて、廊下の壁を手と足を両壁について天井まで登る技が、できるようになった。

学園のホームページに載せる地図作りを行う授業で、近所を歩き回って作った地図を、グーグルマップでさえ迷ってしまう方向音痴の私に、「これなら迷わないよ」と自信たっぷりに見せてくれた。「ことば、かず」という授業では、先生所有の、スター・ウォーズの本を借りて、キャラクターの名前でカタカナの勉強をしたと楽しそうに話してくれた。お昼ご飯には、保護者の方がたくさん釣れたからと鯛を持ってきてくれて、お刺身と潮汁をごちそうになったと、自慢していた。

あれ、こんなに学校のことを話す子だったつけというくらいいろんな話を聞けて、ああ、やっぱりすごく学校が楽しかったんだなあと伝わってきた。

二年間通った、前の学校の先生や友達たち、二年生になったら一人一台持つのを楽しみにしていたアイパッドのことも全く未練がなさそうに、「ヒミ

ツキチ森学園」でトライアル入学を終えた初日、息子は、「ぼく、あの学校に行く」と高らかに宣言した。

というわけで、夏休み明けの九月から息子は「ヒミツキチ森学園」に入学する予定だ。体操服も、給食袋も、お道具箱も、上履きもいらないので、新学期の準備は不要だ。たっぷり遊んで、たくさん寝て、九月を心待ちにしよう。

(斎藤 美衣)

人類の引き起こしたもの

わが国でも新型コロナウイルス禍は第二派到来の様相を呈しつつある。しかし第二派においては、第一派の場合と比べて、明らかに死者数が激減しており、深刻の度合は軽減化しているのが救いとも言える。この病を契機として、人類はこうした病との共存の道を図りながらその暮らしを構築してゆかなければならないという新たな時代を迎えた。

そうした中、あの令和二年七月豪雨のような災害が発生し、その被害の甚大な状況を目の当たりにして、改めてより深刻な課題があったことに気づく。私の暮らす沼津でも、今年の梅雨は

昨年までとは様変わりし、台風を思わせる暴風雨に何度となく襲われた。

温暖化は止むことなく進んでおり、それによる環境変化の深刻化の現象は地球全体に渡って生じている。ニックス・ドーンソンの文章による絵本『北をめざして』を開くと、南北アメリカにおいて、いかに多くの生命が毎年夏季を中心として北極圏に渡っているのかという事実を知ることができる。多くの生命が温暖化の影響を受けているのである。この温暖化という現象を引き起こしているのは同じ地上に生息する人類なのである。そして温暖化は人類自らの首をも締めつつある。

地球という星は、人類も含めそこに息づく生きとし生ける者に等しく自然界から貸与された存在なのである。今その認識に立ち帰り、全人類は自然と真摯に向き合うことにより、温暖化防止への行動を起こす必要がある。正に人類はそうした時代の只中に置かれているのである。

(島田 真幸)

古いフアックス

コロナ禍の巣ごもりの暮らして、古い手紙などの整理をしているうち、印

字のうすれた古いファックスのプリントが三通出てきた。

三通はいずれも河野裕子さんからのもので、日付は2007年2月14日、3月3日、4月6日。

一通目の2月のファックスは、「コスモス」掲載の柿崎村彦さんの作品を調べて欲しいという依頼の電話のあった後のもので、依頼した柿崎さんの作品は「狩野一男さんが、三首探して下さいました。昭和48年3月号の『第四宇宙花』の中のもので、なつかしくあざやかにあの時の印象が蘇って来ました」「この三首があるだけで充分と存じます。私の青春時代は『コスモス』と一緒に過ぎたのだと改めて思っております」など記されていた。

しかしこのファックスの届いた時、私は先の電話を受けて柿崎さんの作品の載っている「コスモス」（夫、奥村晃作の書棚に年毎に整理されていた）を少しずつコピーすべく、自転車でコンビニに通っていた。何回かに分けてコピーした柿崎作品は、速達で河野さんに送った。

二通目はその返信。また坂野信彦さんの昔のコスモス掲載歌探しを依頼するかもしれないが、その時はよろしく

とあった。

三通目は「本日『宮柊二とその歌人たち』のゲラができあがって来ました。読み返しながら改めて『コスモス』との長いご縁を思いました。（中略）奥村さんたちがやっておられた『Gケイオス』のメンバーと活動時期、それから坂野信彦さんの作品（昭和42、43、44年頃）特に守屋ビルを詠まれた歌が見つればお教えいただけないでしょうか」などの内容であった。

守屋ビルというのは「コスモス」の古くからの会員、守屋一郎氏（夫人は守屋純江さん）所有の大森にあるビルで、当時、守屋さんは東京の大森で書店を経営。区会議員などにもなられた方で、「コスモス」（宮柊二先生）にビルのお部屋を提供してくださっていた。その一室に一時期は高野公彦さん（当時は東京教育大生）、のちに坂野信彦さん（当時は慶応大生）が居住された「コスモス」の校正や編集会なども行われていた。

河野さんは昭和39年に「コスモス」に入会。結婚後、永田和宏さんが「塔」の責任者となられたあとにそれを支えるべく平成2年に退会された。

退会後も宮先生への恩顧を大切にされ

て、宮英子さんとの交流も続けられた。

さて、冒頭のファックスのやり取りの結果は、池田はるみさんが聞き手となった「私の会った人びと」（木阿弥書店）の中で「宮柊二と『コスモス』の歌人たち」の章として、高野公彦、坂野信彦、柿崎村彦氏（当時は東京教育大生）の三人の同世代の歌人の話として取り上げられている。また、この三氏のごことは河野さんのご息息、永田淳氏の書かれた『評伝・河野裕子 たっぷりと真水を抱きて』（白水社）に「コスモスの三彦として詳しい。その中で氏が河野裕子さんの「青林檎与へしことを唯一の積極として別れ来にけり」の相手のNとして記されているのが、この坂野信彦氏と思われる。坂野信彦氏の第一歌集『銀河系』の中の「青林檎ひとつつくゑにありながら夕陽のちはつきのかげさす」の作品を河野さんは池田さんとの対談の中でとり上げておられる。

黄ばんだファックスを見ているうち、様々なことが懐かしく思い出されてきた。まもなく八月十二日。河野裕子さんが亡くなられて十年である。

（佐藤 慶子）